

進展的事態の構文と意味

— 構成的な意味に注目して —

宮城 信

キーワード：量的な進展，質的な進展，加算，継続的な事態，構成的な意味

要 旨

継続的な事態には、反復的なくりかえしを表すもの以外に、時間的進行に伴い動作や変化の量や質が加算されていくことを表す進展的事態がある。まず、進展的事態を整理する。次に、進展の意味は語彙的な意味だけに還元されるのではないことを確認する。それを承けて進展の意味は、動詞、副詞、述部アスペクト形式の有する素性の組み合わせによって、構成的に成立することを示す。

1 はじめに

事態の進展には、移動に関するものとアスペクト的なものがある。本稿では、後者の進展を分析する。進展を時間的進行に伴い変化が進むことと捉えるならば、次の (1) (2) は典型的な進展を有する事態（以降「進展的事態」とする）である。

- (1) ビーカーの溶液が どんどん 染まる
- (2) ビーカーの溶液が染まっていく

これらの事態は、時間的進行に伴って染まり具合が増していくことを表すことができる。その解釈では「質的な進展」を表しているということが出来る。多くの場合、副詞「どんどん」や述部アスペクト形式「ていく」*1 と共起して表される。しかしながら、「どんどん」や「ていく」は、かならずしも質的な側面に言及しているわけではない。次の (3) (4) も「どんどん」や「ていく」が共起しているが、事態の質的な進展を表さない。

*1 本稿で考察する「つづける」や「ていく/てくる」は、アクティオンズアルトである。明確に区別した上で、便宜的に「ている」と一括して述部アスペクト形式としておく。

- (3) 鉄棒を どんどん 回る
- (4) 皿を割っていく

(3) は鉄棒を回る, (4) は皿を割る, という動作がくりかえされ, 時間的進行に伴い回るという動作や割れた皿の量が増えていくことを表している。よく知られているように「どんどん」や「ていく」が共起した例は, 程度ばかりではなく, (3) (4) のように事態の量的な側面に言及することができる。すなわち「量的な進展」を表しているということができる。須田 1995 によれば, アスペクト的な進展は, 「対象の量的な蓄積と進行という《進展性》と, ある時間つづくという《持続性》が表現されている」(須田 1995 p.105: 下線は宮城) とする。(1) (2) のような質的な進展や (4) は, 蓄積を有するとすることも可能であろう。一方, (3) の「鉄棒をどんどん回る」のような例は, (回数の蓄積を読み込めるかもしれないが) 蓄積そのものより, 前動作を承けて次々に付け加えられていくこと, すなわち「加算」に注目される表現のように思う。(1) - (4) の例を統一的に扱うため本稿では, 進展の意味を加算を有する事態であると考え^{*2}。どのような進展を表しているのかは, 「どんどん」や「ていく」だけの問題ではない。それ以外の要素を含め, 組み合わせによって進展の意味が成立していると考えられる。本稿では, このような作業仮説に基づき, 進展の意味と組み合わせに注目して考察を進める^{*3}。

本稿の構成は, 以下の通りである。まず2節で, 事態の量的な側面や質的な側面における加算を統括し, 進展を規定する。それを承けて進展的事態を整理する。次いで3節で, 進展と継続的な事態の関係を述べる。4節で, 量的な進展と質的な進展とをそれぞれ記述し, 組み合わせの条件を示す。5節で, 進展的事態を表す文の構造について分析し, どのような計算によって進展の意味が成立するのかを考察する。最後に6節で, まとめる。

*2 動作の過程のそれぞれの段階を加算的に捉える場合と, 複数の動作を加算的に捉える場合とがある。いずれの事態も加算を有していると考え。

*3 本稿では, 「ていく」「てくる」に関する視点に関わる制約や語彙的な生産性は, 問題としない。表記は, 個別に記述する必要がない限り, 便宜的に「ていく」で代表させる。

2 進展的事態の規定

1節で確認したように、進展的事態において加算されるのは、量的なものとの質的なものがある。これらの差異をふまえた上で、進展的事態を次のように規定する。

(5) 進展的事態の規定：

時間的進行に伴い、動作または結果の量・質的な加算を有する事態。

(5) のように「進展」を規定すれば、継続的な事態を表していたり、「てくる」が共起したりしていても、次の(6)(7)は、進展的事態を表さない。

(6) 友人を待つ

(cf. *友人を どんどん 待つ / *友人を待っていく / 友人を待ちつづける)

(7) 突然、雨が降ってくる

(6) は、「待つ」という動作が、前動作を承けて次々に付け加えられていくという加算の意味と整合的ではないため、「どんどん」や「ていく」と共起できない。また、(7) の「雨が降ってくる」は、発生を表し、量的または質的な加算を表してはいない。一方、「どんどん」が共起した「雨がどんどん降ってくる」のような例は、雨の量的な加算を表している。

ここまでの考察を承けて、進展的事態の整理を試みる。進展的事態は、まず、量的に加算する場合と質的に加算する場合とに分けられる。また、量と質の側面がどこに帰属するのかを考えると、動作そのものに注目する場合と変化する対象^{*4}に注目する場合とに分けられる。結果的に、進展的事態は、以下のように「動作の進展」「結果の進展」「動作の様態の進展」「変化の進展」に交差的に四分類される。

(8) 進展的事態の分類

	動作に注目	変化に注目
量的な進展	a. 動作の進展	b. 結果の進展
質的な進展	c. 動作の様態の進展	d. 変化の進展

*4 複数の動作主体に関する結果の加算を表す「生徒達がどんどん座っていく」「強風でポールがどんどん倒れていく」等の非対格自動詞の例もここに含まれる。

- (9) a. 「動作の進展」：動作の量的な加算
・鉄棒を どんどん 回っていく
- b. 「結果の進展」：動作によってもたらされた結果の量的な加算
・皿を どんどん 割っていく
- c. 「動作の様態の進展」：動作のサマや強さの質的な加算
・バットを どんどん 大きく 振っていく
- d. 「変化の進展」：変化の質的な加算
・ピーカーの溶液が どんどん 染まっていく

本稿で示した四分類と先行研究の分類との関わりを確認しておく。まず、「どんどん」が共起した文を分析した小西 1999 では、主な用法として「[程度]の進行を表す」「[部分・範囲]の進行を表す」「[事象・対象の複数]を表す」という三分類を提示する(これらの分類とは別に「どんどん遊ぼう」のような例についての指摘もある)。小西の分類は、Jackendoff 1996 で提案される事象構造モデル^{*5}によって、進展的事態を記述・説明することを目的としており、本稿のような素性分析による体系的な位置づけを目的とした分類とは異なる。「ホールの明かりがどんどん点く」のような例は、「[部分・範囲]の進行」、「[事象・対象の複数]の進行」いずれにも解釈できる。どちらに解釈しても、対象に注目した量的な加算を捉えていると考えられる。よって、本稿では区別せず「結果の進展」に分類する。

「ていく」には、よく指摘されるように移動や方向に関わる用法とアスペクトに関わる用法とがある。截然と分かたれるものではないが、移動や方向に関わる用法は、視点の問題や本動詞としての意義の残存との関わり等複雑な問題を残している。本稿では、論点を明確にするため、アスペクト的用法を中心に検討する^{*6}。「ていく/てくる」の用法については、吉川 1973、高橋 1989,2002 等でも区別されており、詳細な分析がある。吉川は、アスペクト的用法を次のように整理する。

*5 Jackendoff, Ray. 1996 "The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps Even Quantification in English." (Natural Language and Linguistics Theory 14, pp.305-354.) を参照。

*6 移動や方向に関わる用法を(8)の表に組み込むとすれば、「a. 動作の進展」や「d. 変化の進展」と連続的なものとして位置づけられると考えられる。

- (10) a. 出現の過程（してくる） / 消めつの過程（していく）
- b. 変化の過程（してくる, していく）
- c. 過程（動作・作用）のはじまり（してくる）
- d. ある時点までの継続（してくる） / ある時点からの継続（していく）

本稿の(8)の分類と対照させれば、「出現 / 消めつの過程」は「結果の進展」に、「変化の過程」は「変化の進展」に、「ある時点までの / からの継続」は「動作の進展」に、それぞれ対応する。(10c)には限られた用法しかないこと、対称性がなく視点の問題が関係していることから分析を保留しておく。また、(10)の分類からも明らかのように、「ていく」は、過程に注目した継続的な事態を表している。

3 継続的な事態と進展

(5)の進展的事態の規定を承けて、本節では、進展的事態はどのような条件のもとで成立するのかを考えていく。「ていく/てくる」の進展の意味に注目して分析した須田1995は、進展性に次のような特徴を認めている*7。

- (11) 《進展性》と《持続性》の相互関係についていうと、《進展性》は《持続性》を前提としていて、その土台のうえになりつつものである。

(須田1995 p.97)

これは、須田も《進展的な持続性》とするように、持続的な事態の中に進展性を有するものがあるということを示している。須田の言う「持続性」は、本稿の「継続性」に相当する。本稿でも(11)を承けて考察を進める。まず、継続的な事態を次のように規定する。

- (12) 継続的な事態の規定：

過程に注目し、動作が引き続き行われることによって、時間的な幅を有することを表している事態。

*7 仁田1982では、動詞レベルでのアスペクト分析を示し、漸次性の上位概念に変化と持続性を認めている。ただし、仁田の言う漸次性は、変化が過程を有することを指しており、本稿で言う進展の意味とは完全に一致していない。

次の(13)のように、いくつかの述部アスペクト形式によって継続的な事態を表すことができる。

(13) 『日本語動詞のアスペクト』を読んでいる/つづける/ていく*⁸

(13)の諸形式は、共起することで事態が継続的であることを表すが、鈴木 1983 が指摘するように、「ている」と「つづける」「ていく」は、異なるレベルの述部アスペクト形式である。次のように共起する動詞句によっては、「ている」は状態を「ていく」「つづける」は継続的な事態を表すことがある。

(14) 針金が曲がっている

(15) 針金が曲がりつづける/ていく

「曲がる」のような非対格自動詞の場合、「ている」は、(14)のように動詞句を継続化することによって状態として捉えるようにもするのであるが、「つづける」や「ていく」は、(15)のように、「曲がる」という動作が継続することを表す。したがって、「つづける」や「ていく」は、動詞句を動作として継続化する機能を有するアスペクト形式であると言えることができる。「ている」形式と「つづける」形式の差異について考察した呉 1993 の指摘は、本稿の分析にとって示唆的である。

(16) 「～ている」形はある期間中どの局面を切り取っても同じ状態であることを示すのに対し、「～続ける」形は未来の特定の局面が、その一つ前の局面と同質（一つ一つの動作の集合）であることを示すと言える。
(呉 1993 p.18)

以上、継続的な事態とそれに関わる述部アスペクト形式について考察した。「つづける」や「ていく」等の述部アスペクト形式は、動詞句のタイプにかかわらず、事態を動作として継続化する機能を有している。以降、主に「つづける」「ていく」

*8 「まくる」や「すすめる」も継続的な事態を表す述部アスペクト形式であると考えられる。ただし、「*針金を曲げすすめる」や「??気温が上がりまくる」のように語彙的な制限が強いため、本稿では扱わない。

を中心に分析を進める。「ている」形式で継続的な事態を表す場合については、必要に応じて言及する。ここまでほとんど触れなかったが、進展の意味を表すとされる副詞「どんどん」がどのような意味機能を有しているのかを明らかにしなければならない。また、それ以外のどのような条件によって進展的事態が成立するのかということも問題となる。次節では、(8) で分類した進展的事態の意味と進展を表す条件について考察していく。

4 進展的事態の記述

4-1 量的な加算による進展

4-1-1 動作の進展

量的な進展について分析する。量的な進展は、動作と対象の側面で成立する。まず、動作そのものが量的に加算する「動作の進展」を見ていく。次の(17)は、積極的に継続的な事態を表してはいない。一方、「つづける」「ていく」「どんどん」が共起した(18)-(20)は、共に継続的な事態を表している。

- (17) 鉄棒を回る
- (18) 鉄棒を回りつづける
- (19) 鉄棒を回っていく
- (20) 鉄棒を どんどん 回る

(17)は、継続的な事態ではないので進展の意味を表さない。一方(18)は、継続的な反復動作を表すが、進展的事態としては解釈されにくい。(19)(20)のように「ていく」か「どんどん」が共起していれば、動作が加算されていく「動作の進展(9a)」と解釈されやすい。2節で述べたように、「待つ」のような動詞は、動作が次々に加わっていくという加算の意味と整合的ではないため進展的事態を表すことはできない。特徴の一つとして、区切れが明確ではないことがある。表す事態がより状態的事態であることから、これらの動詞を状態性動詞⁹⁾とする。動作の進展の考察を次のようにまとめる。

*9 状態性動詞とは、「待つ」「留まる」「漂う」「含む」等の動詞である。

(21) a. 動作の進展の規定：

時間的進行に伴い、動作が量的に加算する事態。

b. 動作の進展の条件：

状態性動詞以外の非変化動詞に「ていく」か「どンドン」が共起している。

4-1-2 結果の進展

次に、対象に関する変化の結果が量的に加算する「結果の進展」を見ていく。割った結果である割れた皿の数は、量的な加算と捉えることができる。

(22) 皿を割る

(23) 皿を割りつづける

(24) 皿を割っていく

(25) 皿を どんどん 割る

動作の進展の場合と同様に (22) は、継続的な事態ではないので進展の意味を表さない。一方 (23)-(25) は、くりかえしを過程とした継続的な事態を表している。しかしながら、変化の結果を加算していく「結果の進展 (9b)」と解釈されるのは、(24) (25) だけである。「動作の進展」との差異は、残存する結果を加算していくことである。したがって、動詞句は状態変化を表す。他動詞「割る」の場合は、動作の加算も並行的に潜在していると考えられるが、進展の意味として注目されているのは、やはり変化の結果の加算であろう。結果の進展の考察を次のようにまとめる。

(26) a. 結果の進展の規定：

時間的進行に伴い、状態変化の結果が量的に加算する事態。

b. 結果の進展の条件：

状態変化動詞に「ていく」か「どんどん」が共起している。

4-2 質的な加算による進展

4-2-1 動作の様態の進展

質的な進展について分析する。質的な進展は、動作と対象の側面で成立する。まず、動作のサマや強さが質的に加算する「動作の様態の進展」を見ていく。

- (27) バットを 大きく 振る
- (28) バットを 大きく 振りつづける
- (29) バットを 大きく 振っていく
- (30) バットを どんどん 大きく 振る

(27) は、これまでと同様に継続的な事態を表さないが、(28)-(30) は、継続的な事態を表すことができる。(28) の「つづける」は、「大きく」のような情態性を有する副詞的成分^{*10}（以降「情態成分」とする）が共起しても、進展的動作を表すことができない。「大きく」のような情態成分が共起し、かつ「どんどん」や「ていく」が共起した(29)(30)では、「大きく振る」動作が加算していく「動作の進展(9a)」以外にも、時間的進行に伴い、振りが大きくなっていくという動作のサマが質的に加算する「動作の様態の進展(9c)」を表すことができる^{*11}。

次の(31)のように「どんどん」が共起すると、「ている」や「つづける」でも動作の様態の進展を表すことができる。

- (31) バットを どんどん 大きく 振っている/つづける

*10 北原 1975 では、情態副詞を次のように規定する。

情態的な素材概念を具有し、動作・作用あるいは存在的概念を具有する用言の、その概念「こと」の情態を修飾限定するのである。 （北原 1975 p.23）

*11 動作の様態の進展を詳細に見ていけば、「バットをどんどん大きく振っていく」のように動作のサマに注目する場合と「壁をどんどん強く叩いていく」のように動作の強さに注目する場合とがあることが分かる。共に動作のあり方である様態に注目した表現であり、区別する必要はない。また、「ボールをどんどん速くに蹴っていく」のような場合は、対象の変化に注目しているので「変化の進展」である。

「ている」や「つづける」の場合、質の進展を表すには「どンドン」の共起が必要である。質の進展の成立には、動作の継続性と情態性に加えて、動作の量や質を加算的に捉える「どンドン」の機能（以降「加算化」とする）が条件となる。(29)が動作の様態の進展を表せることから、「ていく」にも加算化という機能を認めることができる。動作の様態の進展の考察を次のようにまとめる。

(32) a. 動作の様態の進展の規定：

時間的進行に伴い、動作の様態が質的に加算する事態。

b. 動作の様態の進展の条件：

状態性動詞以外の非変化動詞と情態成分に「ていく」か「どンドン」が共起している。

4-2-2 変化の進展

最後に「変化の進展」を見ていく。変化が加算していく過程が認知しやすいことから、1節でも取り挙げたようにもっとも典型的な進展的事態とすることができる。

(33) ビーカーの溶液が染まる

(34) ビーカーの溶液が染まっている

(35) ビーカーの溶液が染まりつづける/ていく

(36) ビーカーの溶液が どンドン 染まる

これまでの例と同様に、(33)は継続的な事態を表さない。また、(34)の「ている」は、「染まっている」状態を表していると捉えやすい。一方、(35)の「ていく」の場合と、(36)は染まったビーカーの数が量的に加算していく「結果の進展(9b)」以外に、溶液全体の染まり具合が次第に増していくという変化が質的に加算する「変化の進展(9d)」を表すことができる。興味深いのは、(35)「ビーカーの溶液が染まりつづける」でも、「染まる」という変化が質的に加算する進展的事態を表すことができる点である。このことは、「染まる」のようないわゆる進展的变化を含意する動詞が「どンドン」「つづける」「ていく」によって継続化されると、進展の意味を成立させることを表している。「つづける」だけでは、加算的な事態を表すことができないので、これらの動詞は語彙的に加算性を含意していると考えられる。進展的变化を含意する動詞であるかどうかは、副詞「だんだん」が共起できるかどうか、一つのテストになる。

(37) 進展的变化を含意する動詞：（気温が）上る，色付く，染まる，伸びる，
太る，広がる，ゆるむ，等

(38) 進展的变化を含意しない動詞：泳ぐ，こねる，出る，散る，叩く，投
げる，割る，等

進展的变化を含意する動詞（以降「進展性動詞」とする）は，情態性を有し，それに語彙的に有する加算性が結びつき，動作として継続化されることによって質的な進展を表すと考えられる。これらの動詞が情態性を有していることは，「とても（～ている）」のように純粋程度副詞によって程度修飾できることから確認できる^{*12}。また，進展性動詞の「ている」形式が「氷柱がしばらく溶けている」のように動作の継続と「氷柱が完全に溶けている」のように結果の状態を表しうるのは，加算性を状態として捉える場合と変化を状態として捉える場合とがあるからである。

進展性を含意しない動詞であっても，次の(39)(40)のように情態成分が生起すると，変化の進展としても容認性の高い表現となる。

(39) 生クリームを 堅く 泡立てていく

(40) 氷山が どんどん 小さく 割れる

このように変化の進展の表現に要求されているのは，「動作の継続性」「加算性」「変化」「情態性」であり，共起する要素によって，これらが満たされれば，変化の進展が成立するのである。変化の進展の考察を次のようにまとめる。

(41) a. 変化の進展の規定：

時間的進行に伴い，変化が質的に加算する事態。

b. 変化の進展の条件：

進展性動詞に「どんどん」「つづける」「ていく」が共起するか，
状態変化動詞と情態成分に「どんどん」「ていく」が共起している。

*12 北原 1975 では，程度副詞を次のように規定する。

程度の素材概念を具有し，情態的概念を具有する用言・副詞・体言などの，その概念「さま」の程度を修飾限定するのである。（北原 1975 pp.23-24）

4-3 進展的事態の条件

ここまでの考察を整理すると、進展の意味の成立には、次のような要素の組み合わせが条件となることが分かった。

- (42) a. 動作の進展：動作の継続性，加算性
- b. 結果の進展：動作の継続性，加算性，変化
- c. 動作の様態の進展：動作の継続性，加算性，情態性
- d. 変化の進展：動作の継続性，加算性，変化，情態性

進展的事態の条件に共通している素性は、動作の継続性と加算性である。以下に(5)の進展的事態の規定を再掲する。

(43) 進展的事態の規定：

時間的進行に伴い，動作または結果の量・質的な^{〔加算性〕}加算を有する事態。

進展の意味を成立させているのが動作の継続性と加算性であるとする分析は、(43)の規定からも支持される。では、それぞれの進展的事態の有する素性はどのようにして組み合わせられているのかを見ていく。

(44) 動作の進展の条件：

- a. 「どンドン」の加算化と継続化 + 状態性動詞以外の非変化動詞
 ・ 鉄棒を どンドン 回る
- b. 状態性動詞以外の非変化動詞 + 「ていく」の加算化と継続化
 ・ 鉄棒を 回っていく

(45) 結果の進展の条件：

- a. 「どンドン」の加算化と継続化 + 状態変化動詞の変化
 ・ 皿を どンドン 割る
- b. 状態変化動詞の変化 + 「ていく」の加算化と継続化
 ・ 皿を 割っていく

(46) 動作の様態の進展の条件：

- a. 「どンドン」の加算化と継続化 + 情態成分の情態性 + 状態性動詞
以外の非変化動詞
・バットを どンドン 大きく 振る
- b. 情態成分の情態性 + 状態性動詞以外の非変化動詞 + 「ていく」の
加算化と継続化
・バットを 大きく 振っていく

(47) 変化の進展の条件：

- a. 「どンドン」の加算化と継続化 + 進展性動詞の変化と加算性と情態
性
・ビーカーの溶液が どンドン 染まる
- b. 進展性動詞の変化と加算性と情態性 + 「ていく」の加算化と継続化
・ビーカーの溶液が 染まっていく
- c. 進展性動詞の変化と加算性と情態性 + 「つづける」の継続化
・ビーカーの溶液が 染まりつづける
- d. 「どンドン」の加算化と継続化 + 情態成分の情態性 + 状態変化動
詞の変化
・氷山が どンドン 小さく 割れる
- e. 情態成分の情態性 + 状態変化動詞の変化 + 「ていく」の加算化と
継続化
・氷山が 小さく 割れていく

継続化や加算化は、潜在する素性を顕在化する機能である。既に述べたように進展の意味の成立には、動作の継続性と加算性が要求される。諸要素と素性の関係を整理すると、次のようになる。（角括弧内は、潜在的に含意する素性である。）

- (48) a. 状態性動詞：[継続性]
b. 状態性動詞以外の非変化動詞：[動作の継続性]，[加算性]
c. 状態変化動詞 他動詞：[動作の継続性]，[加算性]，変化
非対格自動詞：[継続性]，[加算性]，変化
d. 進展性動詞：[継続性]，加算性，変化，情態性
e. 情態成分：情態性

これに対して、「どンドン」や継続を表す述部アスペクト形式は、動詞句中の素性から継続的および進展的事態への関数のようなものであると考えられる。

- (49) a. 「ている」：継続化
b. 「つづける」：動作の継続化
c. 「ていく」：動作の継続化，加算化
d. 「どンドン」：動作の継続化，加算化

[動作の継続性]の継続化が[継続性]の動作の継続化によって、動作の継続性を素性として得ることができる。以上、進展の意味が要素の組み合わせによって構成的に成立していることを述べた。次節では、修飾関係の階層に起因する進展の意味の制限について見ていく。

5 進展的事態の構造と意味の計算

量的な進展である「動作の進展 (9a)」と「結果の進展 (9b)」は、(42a,b) から、次のような意味の計算によって成立していると考えられる。

- (50) | [動作の継続性]，加算性，(変化) | 継続化
→ 動作の進展 (結果の進展)
| [継続性]，加算性，(変化) | 動作の継続化
→ 動作の進展 (結果の進展)

一方、質的な進展である「動作の様態の進展 (9c)」 「変化の進展 (9d)」は、(42c,d) から、次のような意味の計算によって成立していると考えられる。

- (51) { [動作の継続性], 加算性, (変化), 情態性 } 継続化
 → 動作の様態の進展 (変化の進展)
 { [継続性], 加算性, (変化), 情態性 } 動作の継続化
 → 動作の様態の進展 (変化の進展)

基本的に進展の意味は、要素の組み合わせに還元されるが、次の (52) は下記のよ
 うに条件を満たしているにもかかわらず、「布を大きく裂くことを、どんどんくり
 かえた」と解釈され、変化の進展を表せない。

- (52) 布を大きくどんどん裂く

「大きく(情態性)」+「どんどん(動作の継続化, 加算化)」+「裂く ([動
 作の継続性], [加算性], 変化)」

→ (42d) 変化の進展：動作の継続性, 加算性, 変化, 情態性

(52) は、「どんどん裂く」を「大きく」が修飾する関係になっている。進展の意
 味は、「どんどん」の継続化によって下線部の動詞句で既に成立し、加算性は、「ど
 んどん」以下の変化と結びついてしまい、外側に情態性を有する要素が生起しても、
 進展の解釈には反映されないのである。どのような進展的事態を表すのかは、修飾
 関係の階層にも関係しており、継続化する要素の内側の階層に生起する要素の組み
 合わせによって決定される（修飾関係の構造については、矢澤 2000 も参照）。

6 まとめ

本稿の考察を整理すると次のようになる。

- (53) ① 進展的事態とは、時間的進行に伴い、動作または結果の量・質的な
 加算を有する事態である。
 ② 進展的事態は、動詞、副詞「どんどん」、述部アスペクト形式、情
 態成分等の組み合わせによって、構成的に成立する。
 ③ 要素の組み合わせばかりではなく、修飾関係の階層によっても進展
 的事態の解釈が制限される。

一部くりかえしになるが、本稿では、進展の意味を語彙的な特性だけでは還元できないことを示し、いくつかの要素の組み合わせによって、構成的に進展の事態が成立することを述べた。また、組み合わせだけではなく修飾関係の階層も解釈の制限に関わることを述べた。このことから、いくつかの先行研究が指摘するように、日本語の aspekto の意味を分析するにあたって「ある要素は、～という意味を語彙的に有している」というような記述だけではなく、構文によって付与される構成的な aspekto の意味にも注目しなくてはならないと言える。

参考文献

- 相原茂 1998 「複合動詞「Vて来る」」 *Language Information Text 2*, pp.109-143, 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻.
- 荒井文雄 1992 「日本語動詞の意味構造と語彙的アスペクト」『京都産業大学国際言語科学研究会報告』13, pp.41-105, 京都産業大学国際言語科学研究会.
- 李美淑 1996 「現代日本語動詞のアスペクト研究－韓国語との対照を通じて－」大東文化大学 人文科学研究会.
- 今仁生美 1990 「VテクルとVテイクについて」『日本語学』9-5, pp.54-66.
- 呉鐘烈 1993 「アスペクトと局面動詞」『日本語と日本文学』19, pp.12-20, 筑波大学国語国文学会.
- 奥田靖雄 1988 「時間の表現(1)」『教育国語』1-94, pp.2-17.
- 北原保雄 1975 「修飾成分の種類」『国語学』103, pp.18-34.
- 金水敏 2000 「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法2 時・否定と取り立て』, pp.1-92, 岩波書店.
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房.
- 小西正人 1999 「変化述語をもつ『どんどん』文の意味からわかる『動詞固有の意味』と『文の意味』,そしてその関係について」『言語学研究』17/18, pp.45-57, 京都大学言語学研究会.
- 鈴木重幸 1983 「形態的なカテゴリーとしてのアスペクトについて」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第一巻 国語学編』, pp.435-460, 三省堂.
- 須田義治 1995 「「してくる」と「していく」」『日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論文集』, pp.92-118, 専門教育出版.
- 高橋太郎 1985 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版.

- 高橋太郎 1989 「動詞 (その八)」『教育国語』1-99, pp.43-58.
- 高橋太郎 2002 「[「してくる」の意味・用法]」『日本語と中国語のアスペクト』, pp.15-40, 白帝社.
- 仁田義雄 1982「動詞の意味と構文—テンス・アスペクトをめぐって—」『日本語学』1-11, pp.33-42.
- 宮城信 2004 「[「少しずつ」構文と進展の意味—「動作の進展」と「変化の進展」—]」『日本語と日本文学』39, pp.32-48, 筑波大学国語国文学会.
- 森山卓郎 1983 「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢 文学編』17, pp.1-22, 大阪大学文学部.
- 森山卓郎 1986 「日本語アスペクトの時定項分析」『論集 日本語研究 (1) 現代編』, pp.78-116, 明治書院.
- 矢澤真人 2000 「副詞的修飾の諸相」仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人『日本語の文法 1 文の骨格』, pp.187-233, 岩波書店.
- 吉川武時 1973 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」(金田一春彦(編)1976『日本語動詞のアスペクト』, pp.155-327, むぎ書房 所収) .

[付記]

矢澤真人先生、橋本修先生、井本亮氏から、動作の継続と進展の意味について適切なコメントをいただいた。進展的事態とは何かということを考え直すきっかけとなった。また、今田水穂氏は、進展的事態の分類に関して「動作の様態の進展」が他のものと異質であること(対になる別の進展的事態がある可能性)を指摘してくれた。諸氏に感謝申し上げたい。本稿では、交差分類による四分類を提示したが、さらに整理・細分化する可能性がある。修正を含めて今後の課題としたい。

みやぎ しん/人文社会科学研究所
(2005年8月1日 受理)